

近畿中央部方言の語彙の実態

— 一音便・文末詞・接続助詞の世代差・男女差 —

田 原 広 史

1. はじめに

近畿中央部方言、すなわち大阪市・京都市・神戸市・奈良市を中心とした地域で使われている言語は、全国的に見てもユニークなものと考えられる。それは、千年の長きにわたって全国に影響を与え続けた中央語としての歴史を脈々と伝えるものであると同時に、あるいは、それゆえ、現在では東京を中心とした共通語に対抗しうる一大方言グループとなっているものでもある。しかし、近畿中央部の言語状況はまだ十分明らかにされているとは言えない。ことに、中央部における地域差、世代差等に関してはまったく手つかずと言ってよく、今後、詳細かつ継続的な調査・記述が必要である。この論考では300人規模の調査結果を元に、世代差、性差を中心に、近畿中央部の言語状況について、ごく一端ではあるが考えてみる。ここでとりあげた調査項目は、ワ行五段動詞のウ音便に関する項目、文末詞に関する項目、理由・原因を表す接続助詞に関する項目の三つである。

2. 調査の概要

この調査は大阪樟蔭女子大学国語表現論（国文学科2回生）の前期授業で行った。まず、学生約80名が二人組になってお互いを調査し、さらに自宅付近に居住する中学生、親の世代、祖父母の世代の3世代を面接調査した。その結果、4世代計303名の話者が得られた。このうち、言語歴が複雑な者を除き、できるだけ移動の少ない者で、かつ近畿在住者236名を選びだした。ただし、ここでいう近畿とは三重県を含めた2府5県である。また、言語歴は府内、県内での移動は可とした。ただし、問題がある場合は個別に判断した。選ばれた人々の世代・性別を表1に、出身地域の内訳を表2に示す。

表1 世代と性別

(人)	中学生	大学生	中年層	高年層	計
女 性	30	62	35	45	172
男 性	31	0	17	16	64
計	61	62	52	61	236

表2 出身および居住している府県（多い順）

府県	大阪	奈良	和歌山	京都	兵庫	三重	滋賀	計
人数	135	63	13	9	9	4	3	236

これを見ると、データに著しい片寄りが見られる。まず世代についてみると、世代ごとの総人数は50～60人でほぼ同じくらいだが、男女比については偏りがある。中学生は男女比が同じだが、大学生は男性が0であり、中年層は2対1、高年層は3対1でいずれも女性が多い。個々のセルについては、割合で処理すればさほど問題はないが、世代、男女でまとめて分析するときには注意が必要である。また、地域差については、大阪府が半数以上を占めており、続いて奈良県が4分の1であることから、近畿中央部方言でも特に南部の方言が反映されていると考えられる。

調査内容は、言語の概要を知るため、できるだけ多くの言語現象に関わるものにした。大きく、語彙、待遇表現、否定表現、可能表現、アスペクト、言語意識の6つに分けた。調査票作成に際して注意した点は、調査者が受講生であり調査は初めてなので、できるだけ選択方式を多く採用し、アンケート方式に近い形にした。ここでは、この6つの大項目のうちの「語彙」に関する項目（30項目）の中から、できるだけまとまりのある11項目を選び、三つのテーマにまとめた。

3. 分析結果

3.1 ワ行五段動詞のウ音便に関する項目

- A1 「スーパーで醬油をコーテクルと言いますか？」
 A2 「隣の家ではしごを借りるとき、はしごをカッテクル、と言いますか？」
 A3 「きのう何かを言ったとき、きのうユータやろ、と言いますか？」

上記の通りに質問を行い、選択肢として、①言う、②聞くけど言わない、③聞いたこともない、の3つから選んでもらった。この3つの間に対する回答（ただし①の割合のみ）をまとめて表3に示した。この表は本来は「世代別」「性別」「全体」の3つの表に分けるべきであるが、スペースの関係上1枚にして表す。以下の表も同様である。

A1はワ行五段動詞のウ音便化に関する問である。表3を見ると、高年層から85、62、57、53%と次第に減っている。男女差は女性61%、男性72%と男性の方がやや多い。ワ行五段動詞のウ音便形について調査したものとしては、佐藤(1987)があり、ワ行五段動詞30語について「～テ」の形で調査がなされている。「買う」について見ると、高校1年生男女では44%、大阪生育男女中年では92%が「コーテ」の形を答えている。

A2は「借りる」と「借る」のどちらの動詞を使うかという問である。A1に関し

て「コータ」に対して「カッタ」という促音便が考えられるが、それとの同音となることからとりあげた。高年から48, 27, 7, 7%と激減しているが、全体的にA1より回答率が少ない。男女差は女性20%、男性25%と男性の方がやや多い。

A3はA1と同様に「言う」の音便形を調べたものであるが、音便化の程度が「買う」と異なる。すなわち、高年から87, 83, 89, 90%と世代差が全くといってよいほど見られない。男女差もほとんど見られない。佐藤(前出)では、高校1年生男女は81%、大阪生育男女中年は93%となっている。

表3 「買ってくる」「借ってくる」「言った」の世代差・男女差

「言う」の百分率	高年層	中年層	大学生	中学生	女性	男性	全体
A5 買一テクル	85.3	61.5	57.4	52.5	61.4	71.9	64.3
A6 借一テクル	47.5	26.9	6.5	6.6	20.4	25.0	21.6
A7 ユータ	86.9	82.7	88.7	90.2	86.6	89.1	87.3

次に「買った」と「言った」について考えてみる。この2つは同じワ行五段動詞の音便現象について調べたものであるが、上に述べたように、促音便化の程度はかなり違う。拍数もまったく同じであり、使用頻度もさほど違うようには思えない。佐藤(前出)の調査における2拍語は「言う・縫う・飼う・酔う・会う・買う・吸う・追う・舞う」の9語である(若年層でウ音便が多く残っている順)。「言う」はやはり飛び抜けてウ音便化が残っており81%、「縫う」から「吸う」までは中程度で40~50%台、「追う・舞う」はほとんどの人が促音便と答えている。どうも「言う」は特例と考えてよいようである。一般に音便現象は特定の語から変化を起こす傾向にある。佐藤(全出, 9^ア-ゾ)によれば、「...一つに日常語としての使用率の比較的低いものに現われやすく、二つにそれと関係すると思われるが、音節数の多い語に現われやすい、といった傾向性があるように思われる。」とあるが、この場合はこの二つの要因のどちらにもあたらない。

次に、「買った」と「借りた」の関係を見てみる。LAJによると近畿地方から西は、出雲地方を除き「借る」の地域となっており、ワ行五段動詞がウ音便になる地域とほぼ一致している。すなわち、「買う」の音便形が「カッタ」となる地域(東日本)では、「借る」という動詞形は元来存在しなかった(少なくとも存在しないと考えられていた)わけである。その理由としては、「買ッた」と「借ッた」で同音衝突が起こるため「借りる」という一段形を採用したと考えられる。西日本では「コータ」なので「借ッた」と同音衝突を起こさず、「借る」のままでよかったわけである。

ところが、現在では、この二つの現象に変化が起こりつつある。「買った」と「借りた」の回答を組み合わせた上で集計しなおしたものを表4に示す。ただし、この調査では、「借ッた」を使うかどうか、あるいは「コータ」を使うかどうかという質問形式をとっているため、「借ッた」を「聞くけど使わない」あるいは「聞いたこともない」と答えた人は、「借りた」を使うとみなし、同様に、「コータ」を「聞くけど

使わない」あるいは「聞いたこともない」と答えた人は、「買った」を使うとみなして集計した。

表3, 表4を見てみると、次のような変化のモデルが考えられる。まずは「借る」が「借りる」に交代しつつある。元来の「コータ・借ッタ」の組み合わせから「コータ・借りタ」の組み合わせが生じたわけである。さらに「買う」の音便が変化し、「買ッタ・借りタ」も生じ始めた。ただし、表4を見ると、高年層でも「コータ・借ッタ」だけではなく、「コータ・借りタ」も同じくらい使われており、「借ッタ→借りタ」の交替がかなり進んでいるのが分かる。中年層ではすでに「コータ・借りタ」の方が多くなっている。それとともに、高年層では13%に過ぎなかった「買ッタ・借りタ」の組み合わせが、中年層では39%にのびている。さらに、大学生ではこの傾向が強調され、半数以上が「コータ・借りタ」を使っている。中学生では変化がさらに進んで、「買ッタ・借りタ」の共通語型が一番多い組み合わせとなっている。

全体の割合としては、「コータ・買ッタ」が20%、「コータ・借りタ」が44%、「買ッタ・借りタ」が35%で、現在では「コータ・借りタ」がいちばん大きい勢力を持っているが、以上のような状況から考えると、いずれ「買ッタ・借りタ」が最も優勢になるに違いない。

表4 「買った」と「借りた」の組み合わせ

「言う」の百分率	高年層	中年層	大学生	中学生	女性	男性	全体
コータ・借ッタ	53.9	26.9	3.3	6.6	18.7	25.0	20.4
コータ・借りタ	46.2	34.6	54.1	45.9	42.7	46.9	43.8
買ッタ・借ッタ	11.1	0.0	3.3	0.0	1.8	0.0	1.3
買ッタ・借りタ	13.1	38.5	39.3	47.5	36.8	28.1	34.5

ただし、この現象は単にこの二つの動詞だけの相互関係で考えるべきではあるまい。「借ル」が「借リル」になると、「コータ」が「買ッタ」になるとではかなり問題が違う。前者は単に動詞語彙を取り替えた個別の変化に過ぎないが、後者はワ行五段動詞音便という体系に関わる変化である。たまたま、音便形が同じ形を持つ可能性があるというに過ぎない。「買った・借りた」について調査したものとしては岸江(1989)があるが、この調査でも「買ッタ・借ッタ」の組み合わせはほとんどない(岸江データでは0.3%、今回の調査では1%あまり)が、それは変化の状況の差で、たまたまこの組み合わせが現れなかったに過ぎないとも考えられる。ここで、近畿中央部におけるこの二つの現象の時間的変化を図1に表してみる。

「借ッタ→借りタ」の交替によって同音衝突の可能性が回避されたことが「コータ→カッタ」の変化の直接の理由とは言えないだろう。それは「借りタ」とはうまく衝突しなくなったが、「刈る」や「狩る」とは依然として同音衝突の可能性はなくなるからである。確かに、「借りる」と「買う」は同じ文脈で用いられる可能性があるが、この変化はやはり音便の体系内部の問題としてとらえるべきであろう。

— 110 (5) —

頂点として使用されていると考えられる。男女差もみられ、全体では女性37%、男性27%と10ポイントも違う。世代別に細かく男女差を見ても各世代とも女性の方が使用率が高い（大学生は女性のみなので除く）。この「サ」の分布は、前出の1960年代に記述されている「ネ」の現象によく似ていると言えよう。

「ヤ」についても割合は低いが、大学生を頂点とした使用状況が見られる。男女差もかなりあり、全体では女性20%、男性9%である。中学生のみについて見ると、女性27%、男性13%とやはり女性の優位が目立つ。大学生は全員女性なので、これも「サ」同様若い女性に好んで使われていると言えそうである。「ヤ」については、地域差もありそうである。もう少し詳しく調査してみないといけないが、河内、和泉地方で特に多く見られそうである。

表5 文末詞「ナ・ネ・サ・ヤ」の世代差・男女差

「使う」の百分率	高年層	中年層	大学生	中学生	女性	男性	全体
そやけどナ	77.1	59.6	80.7	80.3	73.8	78.1	75.0
そやけどネ	39.3	50.0	35.5	26.2	41.9	25.0	37.3
そやけどサ	11.5	26.9	54.8	43.3	37.4	26.6	34.5
そやけどヤ	6.6	7.7	33.9	19.7	20.4	9.4	17.3

以上、4つの文末詞の使用状況を個別に見てきた。次に、ある特定の個人がこの4つの文末詞をどのように使っているかについて考えてみる。4つの文末詞の使用パターンを考えると次の表のようになる。

表6 文末詞「ナ・ネ・サ・ヤ」の組み合わせ

	4	3					2					1				0
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
ナ	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×
ネ	○	○	○	×	○	○	×	×	○	○	×	×	○	×	×	×
サ	○	○	×	○	○	×	○	×	○	×	○	×	×	○	×	×
ヤ	○	×	○	○	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	○	×
回答数	7	23	5	16	0	36	25	8	4	0	2	57	13	4	3	33

(○：使う ×：使わない)

Aは4つ全部使う、B～Eは4つのうち3つ使う、F～Kは2つ、L～Oは1つ、Pは全部使わないということになる。少し複雑になるが、このパターンにしたがって、世代差、男女差の使用率を示したものが図2、3である。グラフ左端白抜き(A)は、4語全部使うと答えた人、斜線で塗りつぶした部分(B～E)は4語のうち3語使う人、次の白抜き(F～K)は2語使う人、点々と塗りつぶした部分(L～O)は1つ使う人、右端白抜き(P)は4つとも使わない人の割合を表している。

世代別の図(図2)をみると、高年層はL(ナのみ使う)と答えた人が約40%、F(ナとネを使う)と答えた人が約20%と続き、バラエティがそれほどないことが分かる。中年層は2つ使うと答えた人(斜線と点にはさまれた部分)とどれも使わないと答えた人(P)の二つが多いのが特徴である。大学生は特定のパターンに偏らず色々な人があるが、3つ使うと答えている人(斜線)が33%おり他の世代と異なる。中学生はパターンは大学生に似ているが、3つ使う人は大学生ほど多くなく、代わってL(ネのみ使う)が多い。また、G(ナとサを使う)が他の世代より多いのが特徴である。ちなみに、平均使用数を算出すると、高年1.34、中年1.44、大学生2.05、中学生1.69であり、大学生が飛び抜けて平均が高い。

次に男女差の図(図3)を見る。男女で違いが見られるものをあげると、D(ナサヤを使う)は女性に多く(8.7%)、男性には少ない(1.6%)。F(ナネを使う)も女性に多く(17.4%)、男性に少ない(9.4%)。逆にL(ナのみ使う)は男性に多く(37.5%)、女性に少ない(19.2%)。またG(ナサを使う)も男性に多く(14.1%)、女性に少ない(9.3%)。男女の平均使用数は、女性1.73、男性1.39語で女性の方が、併用がかなり多いことが分かる。

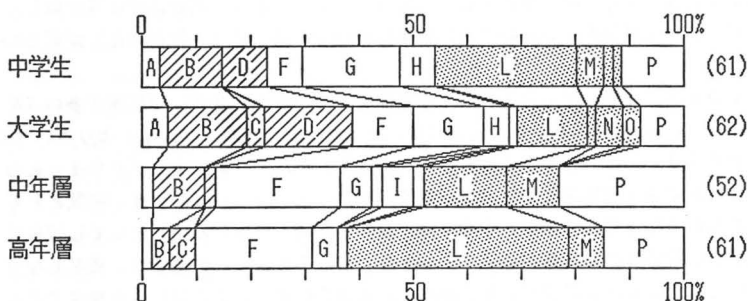


図2 文末詞の使用パターン(世代別)

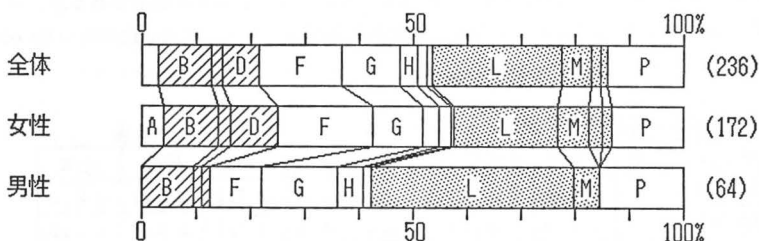


図3 文末詞の使用パターン(全体・男女別)

3.3 理由・原因を表す接続助詞に関する項目

- C1 「雨が降るヨッテやめた」というような「ヨッテ」を使いますか
 C2 「雨が降るサカイやめた」というような「サカイ」を使いますか
 C3 「雨が降るシやめた」というような「シ」を使いますか
 C4 「雨が降るカラやめた」というような「カラ」を使いますか

この4つの間は、理由・原因を表す接続助詞のうち、それぞれの言い方を使うかどうか尋ねたものである。選択肢として、①使う、②聞けど使わない、③聞いたこともない、の3つを設定した。この4項目に対する回答（ただし①の割合のみ）を表7にまとめて示した。全体の使用率でみると、「カラ」(88%)、「シ」(45%)、「サカイ」(39%)、「ヨッテ」(23%)の順である。

個別にみると、「ヨッテ」は高年層から41,39,8,5%と激減しており、特に中年と大学生の間で世代間のギャップが見られる。ただし、「聞いたこともない」人はどの世代もさほど多くない（高年層から7,10,10,16%）。すなわち、若者は常に耳にはしているが、自分では使わないという、同じ集団の中での使い分け（位相語化）が見られる。

「サカイ」は「ヨッテ」と世代の分布がよく似ているが、全体に使用率が多い（高年層から74,51,19,15%）。単純にみれば、「ヨッテ」の方が「サカイ」より古い（あるいは古くさい）言い方であるということになる。ただ、「ヨッテ」「サカイ」とともに、現時点では中高年語とでも言うべき位相語と考えられる。このまま、時間とともに使われなくなっていくのか、中高年語（おじさん語・おばさん語）としてしばらくの間使われ続けるのか観察が必要だろう。ただし、このたぐいの語では、職業的な位相差にも注意を向ける必要がある。商売ことばあるいは芸人ことばという観点である。この点に関しては別の調査を行う必要があろう。

「シ」については、全体的によく使われているようだが、高年層から41,39,45,54%と多少ではあるが、若い人に好んで使われている。「カラ」は共通語形であるが、高年層から73,88,94,95%と若くなるほど使用率があがっており、共通語化が進んでいると言えるだろう。

表7 理由の接続助詞「サカイ・ヨッテ・シ・カラ」の世代差・男女差

「使う」の百分率	高年層	中年層	大学生	中学生	女性	男性	全体
雨が降るサカイ	73.8	51.0	19.4	15.0	39.5	38.7	39.3
雨が降るヨッテ	41.0	38.5	8.2	4.9	24.0	18.8	22.6
雨が降るシ	41.0	38.5	45.2	54.1	44.2	46.9	44.9
雨が降るカラ	73.3	88.5	93.6	95.1	73.3	85.9	87.7

次に、これらの言い方の相互の使われ方についてみる。前出の文末詞のところでも考えたように、ある個人が、4つの言い方を全部使うか、1つだけ使うかという観点で整理することができる。このうち、共通語形である「カラ」は9割近くの人が使うと答えているので、ほとんど、どの組み合わせにも登場する。よって、「カラ」を除いた3語形の組み合わせで考える。組み合わせは表8にあるように8つである。

表8 接続詞「ヨッテ・サカイ・シ」の組み合わせ

	3	2			1			0
	A	B	C	D	E	F	G	H
ヨッテ	○	○	○	×	○	×	×	×
サカイ	○	○	×	○	×	○	×	×
シ	○	×	○	○	×	×	○	×
回答数	17	23	3	25	10	27	61	70

○：使う

×：使わない

Aは3つ全部使う、B～Dは3つのうち2つ、E～Gは1つ、Hは0ということである。ただし、それぞれに「カラ」という共通語形がかぶさっている。よってHは共通「カラ」のみを使っているということである。それぞれの組み合わせの割合を世代別、男女別にグラフに表したものが図4、5である。グラフ左端白抜き(A)は3語とも使う人、斜線で塗りつぶした部分(B～D)は3語のうち2語を使うと答えた人、次の白抜き(E～G)は1語、点で塗りつぶした部分(H)はどれも使わないと答えた人を表している。図の組み合わせの順序は上の表に対応している。

世代別の図(図4)をみると、まず中学・大学生と中高年層のパターンが全く異なることが分かる。若年層の特徴はG(シのみ)とH(どれも使わない)の二つで80%程度になることである。中高年層の特徴は、H(どれも使わない)が少なく、A(3つとも使う)が高年層には15%程度、中年層に10%程度いること、また、B～D(3つのうち2つ使う)と答えた人が中高年層には30%程度いることである。

中高年の2つ使うと答えた人(斜線部分)をみるとC(ヨッテとシを使う)がほとんど見られない。これに対してB(ヨッテとサカイ)、D(サカイとシ)はそれぞれ10%から20%くらい見られる。このことは、ヨッテ・サカイ・シの順序性を示すものである。世代差からみて、これは新旧の順序であろう。すなわち、ヨッテがもっとも古く、サカイがその次、そしてシがもっとも新しいということになる。中高年層でも保守的な人は、ヨッテとサカイを使い、革新的な人はサカイとシを使う。サカイを使わないほど保守的な人は当然シも使わない。かくして、ヨッテとシのみを使う人はほとんどいないというわけである。もちろん、ヨッテ・サカイ・シの3つをすべて使うという柔軟性豊かな人は存在するわけであるが。各世代の平均語数は、高年層1.56、中年層1.27、大学生0.73、中学生0.74であり、文末詞と違って世代が高くなるほど使用語(ここでは方言語彙)のバラエティが増える。

男女差（図5）については、世代差に見られるほどの大きな違いは見られないが、女性の方がやや併用の数が多いようである。ただし、平均語数でみると女性1.08、男性1.03であり、わずかな違いに過ぎない。

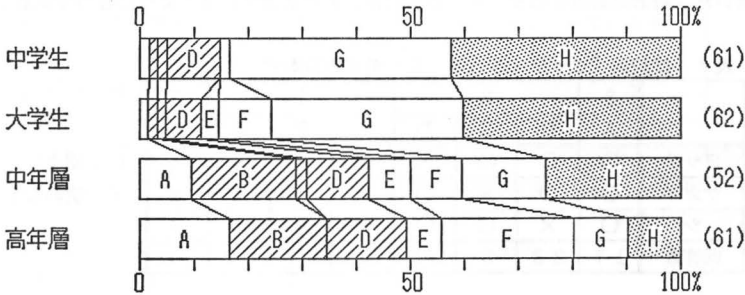


図4 理由を表す接続助詞の使用パターン（世代別）

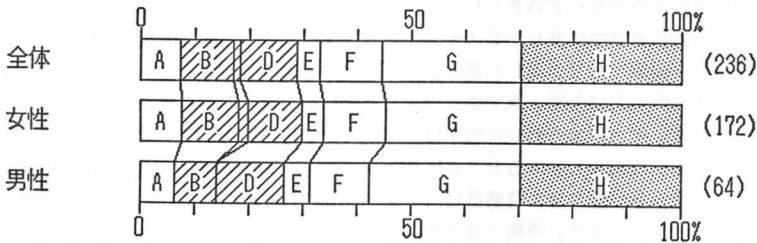


図5 理由を表す接続助詞の使用パターン（全体・男女別）

4. おわりに

以上、調査結果のうちごく一部についての実態と分析を行った。今後も継続的に調査を行い、近畿中央部方言の言語状況の実態を解明していきたい。この結果は、平成2年度前期分で収集したデータに基づいたものであるが、後期分の授業では、世代を小学生、大学生、30歳代、60歳代と少しずつして調査し、現在授業で集計、分析を行っている。この結果も含めた上で、ここでは紙数の都合上扱えなかった項目についても、近いうちにまとめる予定である。

なお、このデータの分析は、データベースソフト「桐」（管理工学研究所）で入力、編集後、荻野綱男氏開発のGLAPS（PC-GLAPS）で集計作業を行った。最後に、調査に協力して下さった方々、実際に調査を行った学生諸氏に感謝したい。

参考文献

- 岸江信介(1989)「『昭和』における大阪市方言の動態」国語学会平成元年度春季大会
要旨
- 佐藤虎男(1987)「音便形から見た大阪弁の動態」(『関西方言の動態に関する社会言語学的研究』徳川宗賢編 科研費報告書)
- 山本俊治(1962)「大阪府方言」(『近畿方言の総合的研究』榎垣実編 三省堂)